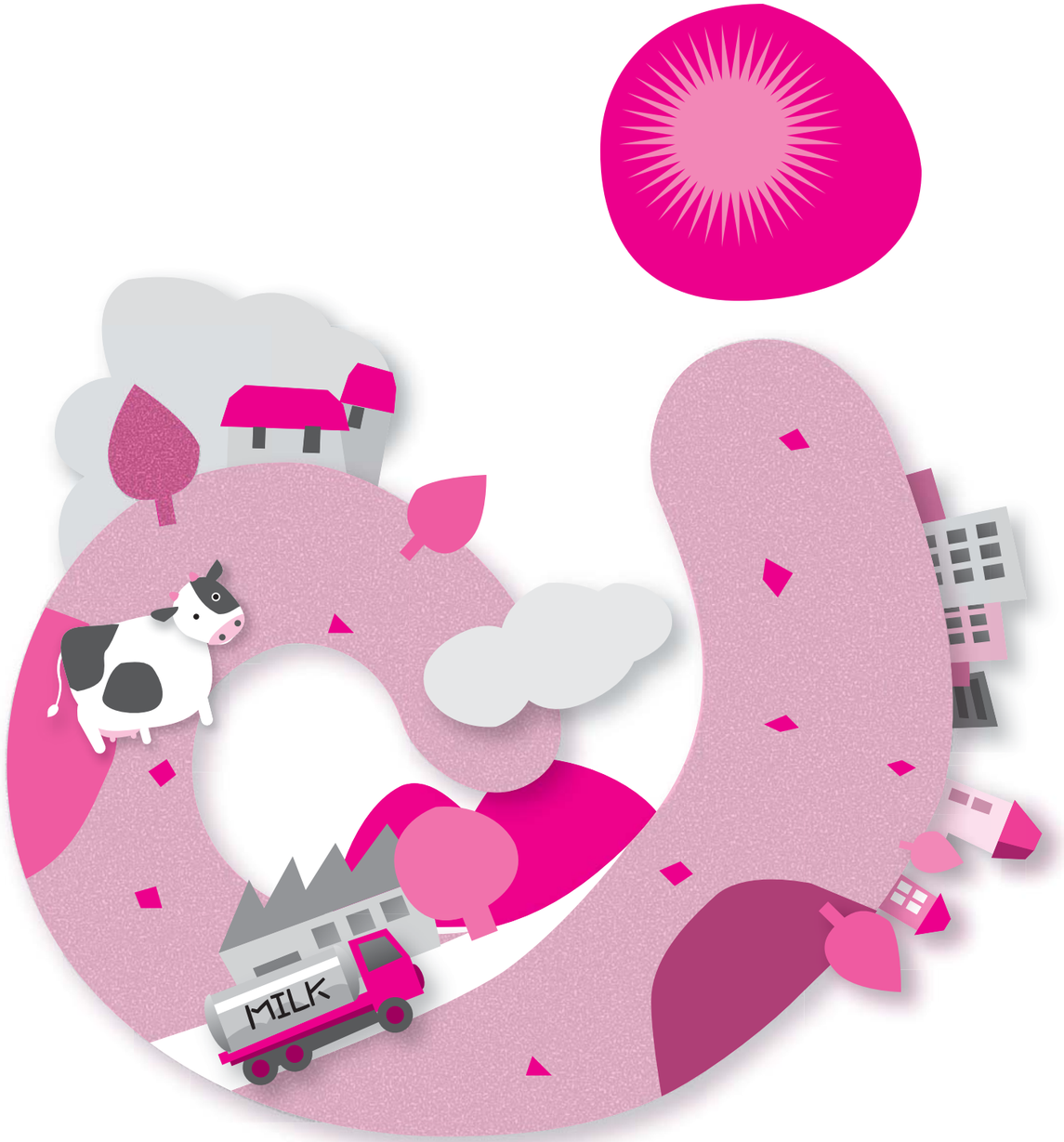
j-milkレポート

vol-8
2013.SPRING

- ＜乳の学術連合の窓＞ 健康科学分野で牛乳乳製品の新しいエビデンス追究
- 平成25年度事業計画及び収支予算
- 牛乳消費構造に関する革新的知見を公表（コウホート分析調査より）

j-milk レポート
vol.8

j-milkレポート vol.8　発行日／2013年 4月
編集・発行／ 一般社団法人 Jミルク
住所:〒104-0045 東京都中央区築地4丁目7番1号 築地三井ビル5階
TEL.03-6226-6351　FAX.03-6226-6354
ホームページアドレス　http://www.j-milk.jp/



Contents

2013.SPRING vol.8

03… 健康科学分野で牛乳乳製品の新しいエビデンス追究
公益財団法人骨粗鬆症財団理事長、NPO日本抗加齢協会理事長、長寿科学振興財団理事
折茂 肇 氏

05… 平成24年度臨時総会を開催
会議報告

06… 平成25年度事業計画及び収支予算
平成２５年度の事業について

12… 25年度事業計画と調査研究の成果を共有
平成24年度Ｊミルクブロック会議

12… ライフステージ別に整理したコンセプトについて協議

13… 「牛乳乳製品摂取はメタボを救えるか」～業界関係者と知見を共有～

13… ミルクでおいしく減塩 乳和食

14… Jミルクの活動：1～2月の主な活動報告

17… 牛乳消費構造に関する革新的知見を公表
コウホート分析調査より

18… 平成25年度学術研究課題及び研究者が決定
乳の学術連合公募の結果

19… 今後のスケジュール

19… 編集後記

Pick Up

乳の学術連合の窓

窓

乳の学術連合の会員の先生方に、ご登場いただくコーナーです。

健康科学分野で牛乳乳製品の新しいエビデンス追究

牛乳乳製品健康科学会議では、2008年10月～2009年3月にかけて、牛乳乳製品とメタボリツクシンドロームとの関係に関する大規模横断調査を実施した。その後、牛乳乳製品を摂取することでメタボリックシンドロームが改善されるかを確認するために、アジア人を対象とした初めての介入試験を行った。その結果、「毎日の牛乳摂取が血圧・血糖値を改善する」ことが確認された。会議の代表幹事である折茂肇先生に、牛乳乳製品摂取とメタボリックシンドロームの関係、牛乳乳製品健康科学会議の役割や、今後の研究等について伺った。（聞き手：高見裕博理事）

折茂 肇 氏
公益財団法人骨粗鬆症財団理事長
NPO日本抗加齢協会理事長
長寿科学振興財団理事

メタボリックシンドロームと牛乳乳製品摂取の相関

折茂：先の牛乳乳製品健康科学会議では、「牛乳を飲むと骨粗鬆症になる」という新谷弘実氏へ反論するため、いろいろな専門分野の先生からなる研究会を立ち上げ、公開質問状を出した。それに対して回答は来たが、科学的根拠は全くなかった。我々はひとつひとつ検証して、それを報告、記者会見も行った。それで新谷問題については一件落着したけれど、牛乳乳製品の栄養健康機能に係る学術的エビデンスを、現在の日本人の生活課題と結びつけて研究検証するため、健康科学分野の研究者で構成される組織を昨年新たに再スタートした。

牛乳を飲むと太る、コレステロールが増えると思っている人がいる。そういう思いこみを払拭する必要がある。「中学・高校生のライフスタイルと身体状況に関する縦断研究2008」を上西一弘先生達が行い、牛乳をほとんど飲まない群に比べて200ml以上飲む群では体脂肪率が低いという結果が出た。そこで次は20代から60代の乳業メーカーの社員とその家族に協力してもらい、「牛乳・乳製品摂取量とメタボリックシンドロームの関連」について大規模横断研究を行った。最終的なアンケート回収数は1万1,026人、解析対象者数は8,659人。結論的には、「牛乳・乳製品の摂取が多い人ではメタボリックシンドロームが少ない」という結果が出た。更に血圧や中性脂肪、HDLコレステロールにも好影響があるというデータが出た。

高見：食品でこのような大規模な横断調査を行ったことは初めてで、こんなにしっかりとしたデータが出たというのも初めてだ。

折茂：次に牛乳を飲んだ人と飲まない人の、「牛乳・乳製品摂取とメタボリックシンドロームに関する介入試験」を行った。介入試験とは薬でいうところの治験に当たる。会議のメンバーには医師が多く、臨床を重視する。牛乳乳製品摂取とメタボリックシンドロームとの関係についても、実際に人で試験しなければデータにはならないということだ。薬の分野では非常に厳しい条件下で行われている。それと同じセンスでナチュラルプロダクツについて介入試験をやったということは画期的なことだ。自然食品には薬のように大きな効果は望めないし、時間もかかるのでやりにくい。ある程度勝算がなければ誰もこういうことはやらない。それをあえてやったということだ。20歳以上60歳以下のメタボリックシンドロームを有する非喫煙男性200人を、1日400ｇ相当（牛乳換算）摂取群（介入群）と、非摂取群（対照群）に分け、６カ月の介入試験を行った。医学、栄養学、統計学の最先端の先生方が協力し、非情に厳格なやり方で行われた。結果、牛乳摂取群ではカルシウム摂取量が300mgから650mgへと増加。運動＋牛乳摂取で血圧が下った。30分相当の運動を週2回でいい。また血糖値も改善されていた。

世界に発信できる研究成果を期待

高見：これからの研究や活動について伺います。

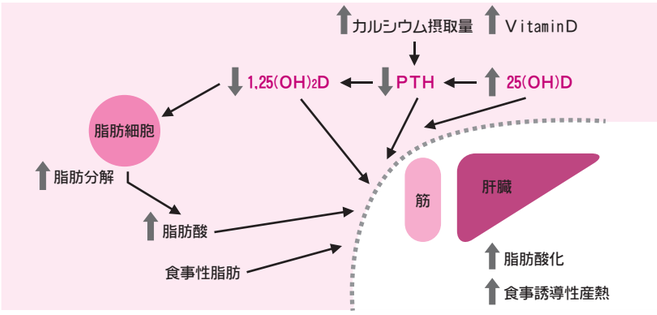
折茂：これまでの牛乳乳製品に関する研究を分析・整理して記録としてまとめ、今まであまり研究されてこなかった部分の研究を進めていく。カルシウムに関しては十分研究されているが、その他にもリラックス・安眠効果とか免疫効果など、牛乳乳製品の機能についての新しい研究を進めていく。それと、牛乳乳製品をもっと摂ってもらうような啓発活動が大切だ。

いま骨粗鬆症が問題になっている。それを予防するためにはカルシウムを800mg摂らなければいけない。日本人のカルシウム摂取量は大体500mgしかない。20歳くらいまでの間に骨を増やしておくことが大事で、骨量はその辺で最大になる。50歳くらいになると確実に減ってくる。骨密度を増やしておくためには、成長期の肝心な時にカルシウムを摂っておくことが大事なのに、高校生になると学校給食の牛乳がなくなり、カルシウムの摂取量が大きく減ってしまう。飲むだけでなく、どう牛乳乳製品を摂るか。食習慣の工夫も必要だと考えている。

年をとって筋力が落ちるサルコペニアについては、治療方法はアミノ酸くらいしかない。牛乳にはアミノ酸も入っている。サルコペニアで筋力が落ちるのを防ぐために筋トレをやっているが、高齢者に筋トレをやれといっても難しい。多少の運動はするにしても、若い人のような筋トレは難しいから、牛乳の効果についてがこれからのテーマになる。

ビタミンDもいま大きな問題になっている。アジアでは大体60～70%くらいの人でビタミンDが不足している。ビタミンDはカルシウムの吸収をよくして骨を強くする。このビタミンD不足は大きな問題だ。アメリカなどではビタミンDを牛乳に添加している。

カルシウム摂取、ビタミンD栄養状態と脂肪代謝の関係

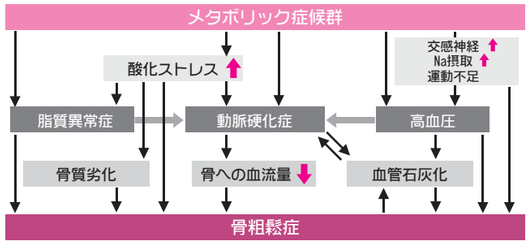


カルシウム摂取量の増加，ビタミンD栄養状態の改善は，脂肪細胞での脂肪分解を促進する。そして，PTHと1,25(OH)2Dの抑制などを通して，筋と肝臓での脂肪酸化と食事誘導性産熱を増加させる。

PTH：副甲状腺ホルモン，1,25(OH)2D：活性型ビタミンD

Teegarden D:JNutr:135:2749-2752.2005より作成

脂質異常症、動脈硬化症、高血圧と骨粗鬆症との相互関係



生活習慣病骨折リスクに関する診察ガイドより

高見：日本人はビタミンDが足りているということだったが、実はそうではない。魚を食べなくなっているし、紫外線が悪いと言って日光にも当たらない人（UVカット）が増えている。最近はくる病が増えているとも聞いている。

折茂：ビタミンDが欠乏するとくる病になる。25-ハイドロキシビタミンD（ビタミンD血中濃度）は測ることができ、30ng/ml以下を欠乏と考える。（多くの論文で報告されているように、世界的な問題となっている）ビタミンDが不足すると死亡率が上がり、免疫、膵臓のインスリン分泌、心血管系にもDが不足すると悪影響がある。脳にも影響があるようだ。今までいわれているのは、「小腸からカルシウムの吸収を促進する作用がある」ということくらい。この『j－milkレポート』でもビタミンDについて連載でもして、その重要性について触れるといいと思う。

高見：牛乳のカルシウムと骨のデータはいろいろある。最近は生活習慣病に関する牛乳の栄養健康機能が科学されつつある。今回の横断調査と介入試験は大変貴重な調査である。牛乳を含め食品でのこうした研究は非常に少ない。それを研究してきた牛乳乳製品健康科学会議の姿勢は評価される。もうひとつには、これらの研究のデータは宝の山。まだ発表していないが、（キレルとか、疲れるなどの）不定愁訴*は、牛乳乳製品の摂取と相関がありそうだ。介入試験でも解析中であり、今後の大きなテーマである。牛乳乳製品健康科学会議に対する期待は、非常に大きいと思う。

折茂：今後いろいろな分野で新しい研究テーマが出てくると思う。その成果をJミルクと共に国民に還元していく。世界に発信できるような研究成果を期待する。

*不定愁訴（ふていしゅうそ）とは、「頭が重い」、「イライラする」、「疲労感が取れない」、「よく眠れない」などの、何となく体調が悪いという自覚症状を訴えるが、検査をしても原因となる病気が見つからない状態を指す。

会議報告

平成24年度臨時総会を開催

平成25年３月６日、KKRホテル東京にて開催。

冒頭、会長挨拶では、平成25年度事業計画で重視した点は、Ｊミルク改革の方向に基づき、具体的な事業効果を実現すること、またあらゆる面で情報発信力を強化することを意識したと説明。さらに会員のみなさまに対して①牛乳の日・牛乳月間の取り組み、②ワールドデイリーサミット（ＷＤＳ）2013横浜を成功裏に開催するための支援、の2点に関して協力を要請した。

来賓として、農林水産省牛乳乳製品課の渡辺乳製品調整官、（独）農畜産業振興機構の森本理事が出席。

渡辺 乳製品調整官
（農水省牛乳乳製品課）

代表して渡辺乳製品調整官が挨拶し、最近の情勢から「生乳需給」、「24年度補正予算」「ワールドデイリーサミット」の3点について述べた。

特に「この平成25年度のテーマは、国としても、酪農の生産基盤の維持、あるいは生乳安定供給の確保などを通じて、国産乳製品の需要の回復、確保という上下両面による対応が必要になるのではなかろうか」という見方を示した。

議長には全国牛乳流通改善協会の橋本正敏会長を選出。

3つの議案について、前田専務理事より説明がなされた。議案は、第6回理事会にて審議決定した内容を提案。質疑応答の後、原案どおり承認された。（6～11ページ参照）

臨時総会における承認議案

第1号議案：
「平成25年度会費及び拠出金の額並びに納入方法について」

第2号議案：
「平成25年度事業計画・収支予算について」

第3号議案：
「常勤役員報酬規程の制定、廃止について」

会長挨拶要旨

浅野 会長

直近のニュースといえば、TPPの問題です。特に我が国の農業及び、食品産業への影響は幅広いもので、中でも国際的に汎用性の高い乳製品は、最も大きな影響を受けるとの指摘もあります。政府には適切な対処を求めると共に状況の変化を注視しながら、Jミルクとしても関係団体と連携して、必要な対応を図っていく所存です。

酪農乳業界の現状では、長期経済停滞と人口減少、少子高齢化で生活者の購買力低下と、食品市場の縮小に伴う競争激化が進んでいます。そういった中で、酪農家戸数の減少や飼養規模拡大の制約、さらに円安や海外穀倉地帯の天候不順等による飼料価格の高騰などで、酪農生産基盤の弱体化が進んでいます。結果、生乳生産は増産型の計画生産の中でも、期待通りになっていません。国産乳製品は、供給機会をみすみす逃しているのではないかと見られています。この様な状況に対処するため、酪農生産基盤の安定強化、需給セーフティネットの構築などの課題に関係者が一体となって、取り組む必要があると考えています。

更に消費税増税に関わる議論も注目されています。総額表示方式の是非、軽減税率を導入するか否かも議論が始まっています。不適切な価格転嫁や、増税に伴う混乱が生じないよう他の食品産業とも歩調を合わせ、酪農乳業界においても政府の適切な対応を求めるため会員、団体間で検討を行っていますが、極力業界で連携した対応を進めたいと考えています。

尚、25年度事業で特に会員の皆様に協力を頂きたい事業が2点。1点目は、牛乳の日・牛乳の月間の取組みです。今年は6年目ですが、社会的認知を一層高め、生活者とのコミュニケーション活動の起点にしたい。6月1日の乳の学術連合フォーラムを皮切りに6月に各種セミナーを数多く開催する計画です。会員、賛助会員の皆様にも、統一ポスターの活用、業界全体で連携した取り組みが実施されるよう、協力をお願いします。

2点目は、「ＷＤＳ2013横浜」を成功裏に開催するための支援です。世界各国の酪農乳業関係者が共通の問題解決を目指して、一般講演、ポスター発表、カンファレンスや展示、シンポジウム等を計画しています。Jミルクでも、乳の学術連合の活動並びに学術研究成果の発表や、海外研究者との積極的な交流を計画しています。また、日本全国から多くの酪農乳業関係者が参加しやすいように、参加費用等の一部助成も、事業計画に織り込みました。会員、賛助会員の皆様を始め各組織から、このＷＤＳへの参加について、特段の配慮を賜りますよう、改めてお願い申し上げます。

Reference

平成２５年度の事業について

平成25年度事業計画及び収支予算

公表：平成25年3月29日要約・抜粋版。詳細は　http：／／www.j-milk.jp／

Ⅰ.わが国酪農乳業をめぐる情勢並びに課題と対応

１．酪農乳業をめぐる最近の情勢

要　旨

最近のわが国酪農乳業は、①牛乳乳製品消費の構造的低迷、②国内酪農生産基盤の弱体化、③国産乳製品供給の不安定、④小売価格の値下げ圧力の強まり、⑤国際市場における乳原料調達の不安定、⑥放射性物質汚染の継続的な影響、⑦予断を許さないＴＰＰ等の動向等により、生乳及び牛乳乳製品の需給が不安定な構造にあるとともに、酪農・乳業の経営環境が厳しい状況にさらされている。

こうしたなか、政府は、生乳生産基盤を維持するとともに、牛乳乳製品の底堅い需要の確保を図るため、「生乳需要基盤強化対策」を措置し、酪農乳業の一体的な取り組みを支援することとなった。

また、本年10月に横浜で開催される「ワールド・デイリー・サミット（WDS）2013」には世界各国の酪農乳業関係者が集い、産業全体が抱える諸課題の解決に向けた情報交流が行われることから、わが国においても多くの酪農乳業関係者の参加が期待されている。

２．酪農乳業の課題と対応

上記１で整理した酪農乳業を取り巻く構造的課題や最近の環境・情勢に的確に対処し、わが国酪農乳業の持続的な発展を目指すため、平成25年度においては、主に、以下の課題に積極的に取り組むことが必要である。

要　旨

① 牛乳乳製品の市場規模を維持し拡大するための取り組み

食品市場や小売流通業の構造的変化、生活者の食品の安全・安心への要求の高まりに適切に対応するため、牛乳乳製品の価値向上や安全・安心の確保を図るための戦略的取り組みを酪農乳業が連携して推進。

② 酪農生産基盤の安定強化のための取り組み

わが国酪農乳業の安定的・継続的発展のため、国産牛乳乳製品の安定供給が重要な課題であり、国内酪農の生産基盤の安定強化を図るための具体的課題を酪農乳業が共有し連携して推進。

③ 生乳及び牛乳乳製品の需給安定化に向けた取り組み

牛乳乳製品の需給安定を図るために、適切な需給情報を発信するとともに、需給セーフティネットの構築、円滑な需給調整を推進するための在庫水準に対する判断指標の設定などの取り組みを関係者が連携して推進。

④ 放射性物質汚染に対する取り組み

圃場や自給粗飼料の放射性物質汚染状況を把握し適切な対応に資するための取り組みを推進。また、自治体による生乳や飼料の放射性物質検査結果等の情報をわかりやすく提供するなどの活動を酪農乳業が連携して推進。

⑤ 生乳需要基盤強化対策に基づく取り組み

24年度政府補正予算「生乳需要基盤強化対策」に対応し、㋐Ｊミルク事業戦略の実効性向上や相乗効果発現に繋げる、㋑必要に応じ業務体制を改善する、㋒新たな財源拠出を発生させない、等に配慮しつつ関連する補助事業を推進。

⑥ WDS 2013への取り組み

「乳の学術連合」による研究成果の発表や交流ブースの出展、酪農乳業関係者の参加促進等により、その成功に向けて積極的に貢献。

Ⅱ.平成25年度の事業計画

平成25年度における事業については、わが国酪農乳業をめぐる情勢並びに課題に適切に対応するとともに、『平成25年度の事業計画の基本的な考え方について』（平成24年度第5回理事会決定・平成25年1月23日開催）、『平成25年度における「災害等危機管理対策事業」並びに「生乳及び牛乳乳製品流通関連事業」の基本的な進め方について』（平成24年度第3回需給取引専門部会決定・平成25年1月21日開催）、『平成25年度の普及関連事業及び広報関連事業で強化継続及び新規・拡充する主要な取り組み内容』（平成24年度第2回普及専門部会決定・平成25年2月1日開催）等を踏まえ、次の事業を実施するものとする。

１．平成25年度事業計画の位置づけ

平成25年度の事業計画は、Ｊミルクの改革方向を踏まえて平成23年度に策定された事業戦略の更なる徹底を図り、具体的な事業効果を実現する年度（普及関連事業にあっては「3か年計画」の２年度目）として、次のように位置づける。

①24年度に整備した新たな事業推進体制（内部業務体制及び外部連携組織）の円滑な運営と必要な改善により事業戦略を着実に実行する。

②わが国酪農乳業をめぐる共通課題等について、業界内での認識の共有化を進めるとともに、より具体的な取り組みが推進されるようにする。

③酪農乳業関係者及びミルクインフルエンサーのニーズに十分に対応しつつ、情報発信力の更なる強化を図る。

④会員組織及び政府などとの事業連携を推進することにより、業界全体における事業の効率化及び相乗効果の実現に貢献する。

⑤新たな公益法人としての事業を開始する。

２．平成25年度事業の主な内容

平成25年度においては、次の７つの事業項目について、以下の主な内容で事業を推進する。

（１）WDS 2013支援特別事業
（２）生乳需要基盤強化対策特別事業
（３）災害等危機管理対策事業
（４）生乳及び牛乳乳製品流通関連事業
（５）牛乳乳製品普及関連事業
（６）広報関連事業
（７）総務関連事業

（１）WDS2013支援特別事業

平成25年10月に横浜で開催される「WDS 2013」では、国際的な酪農乳業産業の動向並びに世界の酪農乳業における多様な課題及びその解決に向けた専門的議論や学術研究の成果を共有化することが可能である。こうしたことから、今後のわが国酪農乳業の在り方及び諸課題への対処方策について関係者が共同して考える重要な機会として位置づけ、その成功に向けてＪミルクとしても積極的に貢献するため、平成25年度に限定した特別事業として、主に次の内容を実施する。

主な事業内容

①WDS 2013の場で、「乳の学術連合」による学術研究成果を発表、海外の研究成果を国内で活用するための国際的ネットワークの構築などの活動を支援。

②酪農乳業関係者がWDS 2013に積極的に参加し諸外国との関係者との交流が十分にできるようにするために協力・支援。

（２）生乳需要基盤強化対策特別事業

酪農生産基盤強化及び国産乳製品の需要創出を図るために政府が緊急に実施する生乳需要基盤強化対策について、Ｊミルクが現在推進している普及関連事業のなかでその実効性の向上を図ることを主眼に推進するとともに、国産牛乳乳製品の価値訴求と需要創出の相乗効果の発現に繋がることを前提に、追加的な財源拠出を必要としない規模で、主に次の内容を実施する。

主な事業内容

①乳の関する新たな知見や研究成果を利用した消費者とのコミュニケーション活動の起点として、「牛乳の日」「牛乳月間」に、セミナーなどの活動を強化して実施し、併せて、統一的な啓発資材等を通じて、酪農乳業関係者の取り組みを支援。また、小学校など学校給食の現場での認知を高めるとともに、業界の連携した活動についてのメディア広報活動を推進。

②小売流通業者・外食関係者及びメディアに対して、国産牛乳乳製品の価値訴求、新たな利用や販売方法の啓発を行うため、商品展示会、店舗を活用した販売促進・食育活動のモデル的提案などを実施。

（３）災害等危機管理対策事業

酪農乳業に係る災害や事故などの危機管理体制を共同して確立するとともに、東日本大震災からの復興再生を着実に推進する観点から、国などの対応を踏まえつつ、主に次の内容を実施する。

主な事業内容

①生乳及び牛乳乳製品の安全･安心に関して、緊急時における業界の共同した対応を推進するため、現状の「放射性物質対策連絡会」を「酪農乳業危機管理対策連絡会」に衣替えして運営。なお「放射能問題プロジェクト」は廃止。
②農地の放射性物質汚染の除染及び当該地域で栽培される飼料作物の安全性を確保するために必要な放射性物質検査などについて、国の対策などを踏まえつつ、必要な支援を継続。

（４）生乳及び牛乳乳製品流通関連事業

酪農生産基盤の強化、牛乳乳製品の流通及び需給の安定を図る上での、生乳及び牛乳乳製品の流通全般に係る酪農乳業の共通課題の改善を図っていく観点から、主に次の内容を実施する。

主な事業内容

①継続して行う基本事業
ア. 生乳及び牛乳乳製品の需給見通し等、流通関連情報の提供。
イ. 生乳検査の精度向上を目指す認証制度の運営。
ウ. 生乳中の動薬等の残留に関する定期検査等、ポジティブリスト制度への対応。
エ. 酪農乳業における共通課題の検討及び共同の取り組みの推進。
オ. 上記の事業を推進するための調査及び情報の収集

②改善・強化のポイント
ア.「生乳及び牛乳乳製品の需給見通し」については、需給判断の目安となる「乳製品の適正在庫」の水準について、改めて検討し業界の基準を整備。
イ. 生乳検査の外部精度管理を徹底するための取り組みを促進するための新たな支援策を推進。
ウ. 共通課題の検討及び共同の取り組みについては、酪農生産基盤の安定強化対策について具体的な検討を推進。また、牛乳乳製品の需給セーフティネット（需給運営の基本となる乳製品の適正在庫水準等）、価値を適正に反映した牛乳価格の形成、ＴＰＰ問題等の諸課題についても対応。
エ. 各種調査結果やデータベース、政府等の既存調査などの情報を業界関係者が有効に利活用できるようにするための工夫を行うとともに、業界関係者向けのセミナー開催や広報対策をさらに強化。

（５）牛乳乳製品普及関連事業

牛乳乳製品の価値向上を図る観点から、23年度に策定された戦略：「平成24年度以降の牛乳乳製品普及関連事業の基本的な進め方について」を踏まえ、３カ年度計画の２年目として、主に、以下の内容で実施する。

主な事業内容

①継続して行う基本事業
ア. 牛乳乳製品の価値向上に繋がる情報を開発し、これを業界関係者及びミルクインフルエンサー並びにメディアに提供。
イ. 上記を着実に推進するため、研究者で組織された「牛乳乳製品健康科学会議」「乳の社会文化ネットワーク」「牛乳食育研究会」で構成される「乳の学術連合」を支援し、連携して活動。
ウ.「乳の栄養健康機能」については、生活者の食生活に係る調査結果を踏まえ、骨強化・骨粗鬆症予防機能、リラックス安眠機能、生活習慣病予防機能、免疫力強化機能に重点をおく。
エ. ターゲットとするミルクインフルエンサーについては、医師、栄養士、学校教諭に重点をおく。

②改善・強化のポイント
ア.「乳の学術連合」の組織運営の円滑化及び「乳の価値向上」につながる研究推進体制を強化。
イ. 確実なミルクインフルエンサーへの情報の開発・提供を行うため、日本栄養士会、全国学校栄養士協議会などの外部団体との連携した取り組みを強化。
ウ. 健康・栄養面に係る情報活動について、特に乳幼児及び若い女性を対象とした食育教材等の開発を推進し、小売流通等とも連携して啓発。
エ. 過去に開発された情報及び政府・外部団体の調査情報などを再評価し優れた情報の有効活用を推進。
オ. 伝わり易く解り易い情報活動のため表現開発の体制を改善・充実し、ターゲット別、チャネル（利用者）別に情報提供を推進。
カ. 業界全体における普及関連事業の効率化と相乗効果の実現を図る観点から、会員及び地域普及組織等のニーズに対応した情報開発を一層強化するとともに、食育等の個別事業での連携を推進。また、望ましい事業連携体制の在り方についても検討。

（６）広報関連事業

平成24年度の事業推進上の課題を踏まえ、主に次の内容を実施する。

主な事業内容

①継続して行う基本事業
ア. ＷＥＢサイト（ホームページ等）による情報発信活動。
イ. 記者会見の開催と運営、広報資料の発表、メディアセミナーなどを通じたＪミルク事業全般にわたるメディア向け広報活動。
ウ. Ｊミルクレポートの発行、ブロック会議の開催等を通じたＪミルク事業全般にわたる会員向け広報活動。

②改善・強化のポイント
ア. 利用し易いホームページの運営。
イ. メディアセミナー等のメディア向け広報活動の充実
ウ. 情報活動全般の評価検証を行うためのモニター制度などの整備。
エ. Facebook等のソーシャルメディアを通したインフルエンサーとの情報交流の推進。
オ. 牛乳乳製品に対するネガティブ情報及び誤認情報への監視を強化し適切な対応を推進。

（７）総務関連事業

Ｊミルクにおける事業全体の効率化と円滑化を図るため次のような改善を図る。

主な事業内容

①事業管理体制、特に「報告・連絡・相談」の徹底並びにスケジュール及び予算進捗に係る管理を強化。
②プロパー及び出向者等で構成される職務体制を踏まえ、職員の高い業務意欲を醸成するための工夫を推進。
③「一般社団法人」に対応した会計システムへの完全移行及び予算管理の推進。
④事業の円滑かつ効率的な実施に必要な内部事務作業等の改善。

Ⅲ.平成25年度の収支予算

平成25年度の収支予算については、以下の基本的な考え方に基づき、別添の収支予算書の通りとする。

１.収入

会費収入は前年度水準とする。
賦課金収入の基本となる拠出金については、24年度と同額の単価（飲用牛乳等向け生乳 1kg当たり５銭、加工向け生乳 1kg当たり２銭）とする。

２．支出

災害等危機管理対策事業、生乳及び牛乳乳製品流通関連事業、牛乳乳製品普及関連事業、広報関連事業、総務関連事業の基本的な事業支出については、賦課金収入の範囲内で予算を配分する。

また、今年度は生乳需要基盤強化対策事業補助金の収入も加えて、生乳需要基盤強化対策事業及びWDS 支援事業と併せて、効率的、効果的な事業の実施を図るものとする。

収支予算書

平成25年4月1日から平成26年3月31日まで

（単位：千円）

科目	予算額	前年度予算額	増減
Ⅰ事業活動収支の部			
1.事業活動収入			
(1)会費収入	2,170	2,170	0
(2)賦課金収入	480,340	477,400	2,940
ア.飲用品	353,590	352,300	1,290
イ.乳製品	126,750	125,100	1,650
(3)補助金収入	109,645	13,000	96,645
ア.生乳需要基盤強化対策事業補助金	109,645	－	－
イ.生乳・牛乳乳製品流通対策推進事業補助金	0	13,000	△13,000
(4)受託事業収入	0	0	0
(5)業務手数料収入	0	0	0
(6)雑収入	3,000	3,000	0
ア.受取利息	3,000	3,000	0
事業活動収入計	595,155	495,570	99,585

（単位：千円）

科目	予算額	前年度予算額	増減
2.事業活動支出			
(1)災害等危機管理対策事業支出			
ア.災害等関連情報提供事業支出	2,300	20,910	△18,610
イ.災害等支援環境整備事業支出	40,000	140,000	△100,000
ウ.直接人件費支出	1,500	0	1,500
災害等危機管理対策事業支出計	43,800	160,910	△117,110
(2)WDS2013支援特別事業			
ア.WDS2013支援特別事業支出	35,040	－	35,040
イ.直接人件費支出	4,601	－	4,601
WDS2013支援特別事業費支出計	39,641	－	39,641
(3)生乳需要基盤強化対策特別事業			
ア.生乳需要基盤強化対策特別事業支出	93,000	－	93,000
イ.直接人件費支出	5,931	－	5,931
生乳需要基盤強化対策事業費支出計	98,931	－	98,931
(4)生乳及び牛乳乳製品流通関連事業費支出			
ア.生乳及び牛乳乳製品流通安定事業支出	40,130	43,620	△3,490
(ア)生乳需給安定対策	21,700	25,900	△4,200
(イ)ポジティブリスト対応推進	7,000	9,000	△2,000
(ウ)生乳検査精度向上対策	11,430	8,720	2,710
イ.課題解決情報提供事業支出	9,235	12,045	△2,810
(ア)共通課題解決推進情報交換	3,235	3,045	190
(イ)共通課題検討分析	6,000	9,000	△3,000
ウ.活動運営管理事業支出	32,850	34,470	△1,620
(ア)調査情報収集	24,350	26,850	△2,500
(イ)専門部会等組織活動	8,500	7,620	880
エ.直接人件費支出	27,429	23,131	4,298
生乳及び牛乳乳製品流通関連事業費支出計	109,644	113,266	△3,622
(5)牛乳乳製品普及関連事業費支出			
ア.乳の学術連合共同事業支出	16,040	0	16,040
イ.牛乳乳製品健康科学情報事業支出	74,652	40,690	33,962
(ア)健康科学情報開発整備	57,556	25,170	32,386
①牛乳健康科学学術研究	23,656	2,250	21,406
②牛乳健康機能実態調査	24,100	15,600	8,500
③牛乳健康科学情報収集整備	9,800	7,320	2,480
(イ)健康科学会議活動	17,096	15,520	1,576
①研究会活動	7,626	14,540	△6,914
②健康科学フォーラム	9,470	980	8,490
ウ.牛乳食育事業支出	23,886	16,800	7,086
(ア)牛乳食育情報開発整備	20,496	13,600	6,896
(イ)牛乳食育研究会活動	3,390	3,200	190
エ.乳の社会文化価値向上事業支出	30,631	19,892	10,739
(ア)乳の社会文化価値情報開発整備	24,348	11,500	12,848
①乳の社会文化価値学術研究	17,948	7,700	10,248
②乳の社会文化価値情報収集整備	6,400	3,800	2,600
(イ)乳の社会文化NT活動	6,283	8,392	△2,109
①研究会活動	4,828	4,992	△164
②乳の社会文化フォーラム	1,455	3,400	△1,945
オ.インフルエンサー情報活動事業支出	64,460	42,157	22,303
(ア)医療関係者向け情報提供	28,250	15,780	12,470
(イ)栄養関係者向け情報提供	22,585	13,002	9,583
(ウ)学校関係者向け情報提供	13,625	13,375	250
カ.業界関係者向け情報活動事業支出	10,460	5,680	4,780
(ア)業界向け情報開発整備	5,000	3,600	1,400
(イ)業界向けセミナー開催	5,460	2,080	3,380
キ.学校給食牛乳飲用定着事業支出	6,620	6,230	390
(ア)学乳安定供給推進	6,620	6,230	390
ク.活動運営管理事業支出	39,298	31,768	7,530
(ア)戦略設定・調査等情報収集	30,600	21,800	8,800
(イ)専門部会等組織活動	4,998	7,668	△2,670
(ウ)地域普及組織支援	3,700	2,300	1,400
ケ.直接人件費支出	29,476	23,826	5,650
牛乳乳製品普及関連事業費支出計	295,523	187,043	108,480

（単位：千円）

科目	予算額	前年度予算額	増減
(6)広報関連事業支出			
ア.メディア広報対策事業支出	24,235	15,570	8,665
(ア)メディアセミナー開催	12,165	8,830	3,335
(イ)メディア向け情報提供	12,070	6,740	5,330
イ.WEBサイト運営事業支出	13,800	34,300	△20,500
ウ.業界向け広報対策事業支出	19,590	24,010	△4,420
エ.活動運営管理事業支出	2,340	3,360	△1,020
オ.直接人件費支出	13,054	14,729	△1,675
広報関連事業支出計	73,019	91,969	△18,950
(7)管理費支出			
ア.役員報酬支出	19,500	21,200	△1,700
イ.給料手当支出	16,413	19,325	△2,912
ウ.退職給付支出	0	0	0
エ.福利厚生費支出	4,060	5,300	△1,240
オ.会議費支出	2,800	4,150	△1,350
カ.旅費交通費支出	3,900	3,500	400
キ.通信運搬費支出	2,000	1,650	350
ク.消耗什器備品支出	2,300	2,300	0
ケ.消耗品費支出	2,280	2,280	0
コ.印刷製本費支出	850	500	350
サ.光熱水料費支出	500	500	0
シ.賃借料支出	21,700	21,600	100
ス.諸謝金支出	1,500	1,500	0
セ.新聞図書費支出	2,330	2,100	230
ソ.交際費支出	900	900	0
タ.集金手数料支出	9,607	9,548	59
チ.消費税支出	3,170	0	3,170
ツ.雑支出	3,000	3,000	0
管理費支出計	96,810	99,353	△2,543
事業活動支出計	757,368	652,541	104,827
事業収支差額	△162,213	△156,971	△5,242

（単位：千円）

科目	予算額	前年度予算額	増減
Ⅱ投資活動収支の部			
1.投資活動収入			
(1)特定資産取崩収入			
ア.運営基金引当資産取崩収入	－	323,132	－
イ.酪農乳業緊急対応基金取崩収入	0	64,500	△64,500
ウ.退職給与引当資産取崩収入	0	0	0
投資活動収入計	0	387,632	△387,632
2.投資活動支出			
(1)特定資産取得支出			
ア.運営基金引当資産取得支出	0	0	0
イ.酪農乳業緊急対応基金取崩支出	0	463,132	△463,132
ウ.退職給与引当資産取得支出	4,777	4,777	0
(2)固定資産取得支出			
ア.什器備品支出	0	0	0
投資活動支出計	4,777	467,909	△463,132
投資活動収支差額	△4,777	△80,277	75,500
Ⅲ財務活動収支の部			
1.財務活動収入			
(1)借入金収入			
ア.短期借入金収入	0	0	0
財務活動収入計	0	0	0
2.財務活動支出			
(1)借入金返済支出			
ア.短期借入金返済支出	0	0	0
財務活動支出計	0	0	0
財務活動収支差額	0	0	0
Ⅳ予備費支出	20,000	10,000	10,000
当期収支差額	△186,990	△247,248	60,258
前期繰越収支差額	199,777	257,057	△57,280
次期繰越収支差額	12,787	9,809	2,978

（注）1、収支予算書は、「公益法人会計における内部管理事項について」に示された様式で作成
2、短期借入は予定しない

Pick Up

平成24年度Jミルクブロック会議開催

25年度事業計画と調査研究の成果を共有

東京会場：平成25年3月15日　場所：都道府県会館　参加人数：約100名

平成24年度Jミルクブロック会議が、東京会場をスタートに全国7ブロックで開催された。東京会場で浅野会長は、「酪農乳業界は多くの課題を抱え、複雑で困難な状況にある。安定的な産業としての発展をはかっていくためには、関係者が連携して難局に適切に対応していくことが必要。Jミルクもその一翼を担うため事業改革に取り組んでいる。このブロック会議で24年度の事業成果と、25年度事業計画の内容、考え方について説明、ご理解をいただくと共に、皆様方の意見を聞く場としたい。なお、6月の牛乳月間を業界全体で盛り上げることと、秋に開催されるワールドデイリーサミットに多くの参加をお願いする。」旨、挨拶した。

「平成25年度事業計画の概要」の説明にあたり丸山事務局長は、「Jミルクの事業改革について振り返ると、特に牛乳乳製品の普及啓発事業のあり方、事業の執行体制、拠出金の見直しが求められた。平成21、22年度はこうした課題を検討し、23年度は事業の執行体制の枠組み作りに着手し、24年度は事業改革を踏まえた新たな事業を開始した。25年度は専門家で構成する外部の連携機関も活動を開始、本格的な事業がスタートする。改革の流れの中で位置づけると、24年度は『事業改革の具体化』の年、25年度は『事業戦略の徹底と事業効果の実現』の年といえる。25年度の事業で特に配慮したことは、①ニーズへの対応と情報発信力の強化、②国や会員組織との連携を通じて事業の効率化、相乗効果の実現、などである」と、これまでの事業改革の流れを踏まえた上での25年度の実施事業、1.WDS2013支援（特別）　2.生乳需要基盤強化対策（特別）　3.災害時危機管理対策　4.生乳及び牛乳乳製品流通関連　5.牛乳乳製品普及関連　6.広報関連、について説明した。

次いでこれまでの調査・研究の中から、①平成24年度「牛乳乳製品に関する食生活動向調査」等から得られた新しい知見、について木村普及グループ部長が、②「牛乳乳製品摂取はメタボリックシンドロームを救えるか」－介入試験から得られた新しい知見－について高見理事が報告。最後に「需給見通しから推察される酪農乳業の共通課題について」と、共通課題への主なJミルクの対応を、本田企画情報グループ参事が説明した。

Pick Up

「栄養士のための食と健康に関する情報の開発及び情報ツールの作成について」

ライフステージ別に整理したコンセプトについて協議

第3回栄養士向け情報開発研究会（開催日：平成25年2月18日、場所：Jミルク会議室）

協議に入る前に前田専務理事があいさつ。平成25年度栄養士向け情報提供事業について概略を説明。事業推進に当たって当研究会の協力を要請した。

前回までの研究会メンバーによる検討を踏まえて整理された「ライフステージ別情報開発に向けたコンセプトの概要（案）」を事務局より提出。胎児期、乳児期、幼児期、学童（児童）期、成年（前期）、成年（後期）、壮年・中年期、高齢期に区分。それぞれのライフステージにおいての、1.身体　2.生活行動　3.食行動　4.栄養上の課題について、男性・女性・共通する内容に分けて整理。議論では、学生と社会人の違い、就業者と非就業者で違うライフスタイルをどう考えるか。高齢期においても、一人暮らしや施設入所者もいるため、さらに現実に即した区分が必要。3の食行動について、アレルギーに関しての取り扱いをどうするか。4の栄養上の課題については、【シーン・対象】と【内容】の整理が必要、などの意見が出され、次回の会合までに再度事務局で整理することとした。

最後に、情報ツールのアウトプットイメージについて各委員から聴取、文字情報よりは絵やイラストを用いてわかりやすいものをという意見が多くだされた。

Pick Up

「牛乳乳製品摂取はメタボを救えるか」～業界関係者と知見を共有～

業界向けセミナー（北海道・平成25年2月8日、愛知県・平成25年2月25日）

細井 孝之氏
国立長寿医療研究センター
臨床研究推進部長

Jミルクでは、牛乳乳製品の価値向上に繋がるエビデンス等を提供する場として、業界向けセミナーを開催した。

主催者挨拶の中で前田専務理事は、「最近、牛乳について検索すると、「牛乳には危険がいっぱい」というサイトが1年以上にわたり上位にきている。これは大きな問題であり、生活者に対し、いかに正しい情報を伝えるかが重要課題となっている。そのためにも業界関係者が正しい知識を共有することが必要。」と述べた。

細井氏が「牛乳乳製品摂取はメタボリックシンドロームを救えるか」と題し行った講演は、①メタボとは？、②なぜ牛乳乳製品とメタボ、③牛乳乳製品摂取とメタボリックシンドロームに関する横断的研究、④なぜ？（牛乳乳製品摂取による体脂肪減少のメカニズム（仮説））、⑤メタボと骨粗鬆症、というメニューで、最新の知見をおりまぜ進められた。

牛乳乳製品の摂取量が多いほど メタボリックシンドロームが少ない

Jミルクの外部連携組織である「牛乳乳製品健康科学会議」が行った大規模な調査研究により、牛乳乳製品の摂取量が多い人ほど、メタボリックシンドロームの割合が低く、最も飲まないグループと比べて、男性で20%、女性では40%も少ないことが判明。さらに牛乳乳製品の摂取量が多いほど、女性では「腹囲」「BMI」「中性脂肪」「血圧」は低く、「HDL」は高い。男性では「血圧」は低かった、という臨床検査による結果が示された。

体脂肪減少のメカニズム（仮説）では、カルシウムや牛乳乳製品の摂取量が増えると、利用可能なエネルギーが減少し、エネルギー消費量が増加。また、カルシウム摂取量の増加、さらにビタミンD栄養状態が改善することで、脂肪細胞での脂肪分解が促進するとの見方を解説した。

Pick Up

ミルクでおいしく減塩　乳和食

第31回メディアミルクセミナー（東京都・平成25年3月5日）

小山 浩子氏
料理家、管理栄養士、
フードビジネスコーディネーター

現在、日本人の栄養健康上の大きな2つの課題は、カルシウム不足と減塩である。牛乳摂取で減塩につなげることができないかということから、実際の食生活の実践につながる「乳和食」が取り上げられた。講師の小山浩子氏は牛乳を使った料理レシピの研究・開発に20年以上取り組んでいる。今回はそのメニューの一部を提供、試食をまじえてのセミナーとなった。参加人数は約100名。

会場では、小山氏オリジナルレシピの①かぼちゃのミルクそぼろ煮、②ミルクごま豆腐、③三つ葉と柚子のミルク茶碗蒸し、④まぐろのミルク山かけ丼の試食が行われた。

日本人の食塩摂取量は一日平均10g。これを6g以下にするのが減塩目標だが、それがなかなか達成されていない。比較的栄養バランスのよいといわれる和食でも、味噌、醤油などの調味料から塩分過多になりやすい。また、だしを取るなど調理が比較的面倒というデメリットがある。常に実践可能なこれからの減塩食に求められることは、「おいしさ＋手軽さ」であるとして、【和食にミルクを活用】→【和食のデメリットを解消】→【おいしくバランスよく減塩】をコンセプトに、1.調味料を牛乳で割ると、おいしさを保ちながら減塩に　2.だし代わりに牛乳で旨みがアップし減塩に　3.牛乳で戻して・ゆでてコクで減塩に　4.牛乳で溶いてコクをプラスし減塩&カロリーダウン　5.化学変化で新しいおいしさの創造と減塩。この5つの切り口で開発されたレシピが紹介された。

これらのレシピは、失敗を重ねながら、実際に生活者に試食してもらい、その意見を取り入れるというマーケティングの上に開発されている。「乳和食」は、ミルクの味がしないからいい、という生活者の逆説的な意見にたどり着くまで15年かかったという。試食した参加者の反応はおしなべて好評だった。

Notice

Jミルクの活動

1～2月の主な活動報告

平成25年1月1日から平成25年2月28日まで

▲リーフレット
血糖値コントロールで糖尿病＆肥満の予防・改善を-牛乳は低GIの優等生！

企画情報グループ関連

■放射性物質問題への対応
＜主な推進業務＞
「災害等支援環境整備事業」の東北分概算払いの実施
平成25年度活動の事業計画・予算策定

■需給見通しの策定・公表
＜委員会の開催等＞
○第5回需給委員会(1月10日)
内容：平成25年度通期の生乳及び牛乳乳製品の需給見通しの検討
○記者レク(1月28日)
内容：平成25年度通期の生乳及び牛乳乳製品の需給見通しの公表
＜主な推進業務＞
○平成24年度通期の需給見通し検討
○平成25年度通期の需給見通し検討
○需給・価格関連データの更新
○ブロック会議資料作成
○牛乳類の小売動向調査の最終まとめ

■ポジティブリスト制度対応
＜主な推進業務＞
○生産現場での「記帳・記録」の徹底を図るための普及パンフレットの配布開始、HP掲載

■生乳検査精度関連
＜委員会の開催等＞
○生乳検査技術者連絡会研修会
東京(2月28日～3月1日)全国から90名超出席。
内容：①講演「食品安全規格の概要」
②生乳検査精度管理認証規程改正内容説明
③生乳検査精度管理認証取得促進事業(案)説明
④分科会Ａ：「事例から見た認証申請のポイント」
分科会Ｂ：「外部精度管理調査評価の考え方」
⑤検査機器メーカーからの情報提供
＜主な推進業務＞
○生乳検査精度管理認証申請確認作業（25年4月1日認証）
5施設申請書チェック→乳技協の調査
○生乳検査精度管理認証更新申請確認作業(25年4月1日更新)
12施設更新申請書チェック→乳技協の調査
○生乳検査技術研修会(乳技協主催)での認証制度の普及活動
○生乳検査精度管理規程の改正案に係る答申案作成
○生乳検査精度認証制度の普及パンフレットの最終校正
○生乳検査技術者連絡会の開催準備

■共通課題への取り組み
＜主な推進業務＞
○追加調査「TPPなど新たな貿易自由化による乳業者、特定地域への影響評価」の調査内容検討→調査開始

■活動運営事業への取り組み
＜委員会の開催等＞
○第2回需給取引専門部会(1月21日)
内容：平成25年度通期の生乳及び牛乳乳製品の需給見通しの検証、評価。
平成24年度事業の進捗状況の検証、評価。
平成25年度事業計画の検証。
生乳検査精度管理規程の改正案に係る答申案協議。
調査事業の報告。
＜主な推進業務＞
○平成24年度活動の進捗と課題の検討
○平成25年度活動の事業計画・予算策定

普及グループ関連

■牛乳乳製品健康科学情報事業関連
＜研究会の開催等＞
○牛乳乳製品健康科学会議 骨分科会(2月6日)
○牛乳乳製品健康科学会議 免疫分科会(2月14日)
○牛乳乳製品健康科学会議 生活習慣病分科会(2月19日)
内容：1月末に公募を締め切った25年度委託研究申請39件につき各分科会で評価し、リラックス・安眠分科会からの推薦分を含め計30件を3月4日の学術研究選考委員会に上程。
○牛乳乳製品健康科学会議 顧問会議(2月23日)
内容：平成24年度の活動を報告。研究体制、研究テーマ、ミルクの研究者育成等に関して幅広くご指導をいただいた。
＜主な推進業務＞
○牛乳乳製品健康科学会議平成25年度委託研究公募1/31締切。39件応募。3月4日研究選考委員会で15件程度を採択予定。3月に一括公表する。(18ページ参照)
○「牛乳摂取とメタボリックシンドローム」 論文投稿・受理の状況
Clinical Nutritionに投稿し2/1に受付られたことが明らかになった。以降、審査に入る。代理店へ迅速な情報提供を催促。

■牛乳食育事業関連
＜研究会の開催等＞
○牛乳食育研究会 学術研究審査委員会・幹事会(2月24日)
内容：25年度委託研究申請23件の中から9件を採択(18ページ参照)。3月17日開催の牛乳食育研究会総会に提案する25年度の活動計画案等につき協議。
幼児教育の専門家を会員として招へい、幹事の先生より推薦を受けることとした。
＜主な推進業務＞
○牛乳食育研究会 平成25年度委託研究公募1/31締切。23件応募。

■牛乳乳製品価値向上活動事業関連
＜主な推進業務＞
○乳の社会文化ネットワーク 平成25年度委託研究公募1/31締切。21件応募。3月4日の研究審査委員会で7件程度を採択。3月に公表。(18ページ参照)

■インフルエンサー情報活動事業関連
＜研究会、セミナーの開催等＞
○栄養士セミナー(沖縄会場)(2月2日)
沖縄県栄養士会の精力的な取り組みにより栄養士を中心に150名参加。
○栄養士向け情報開発研究会(2月18日)
内容：ライフステージ別食生活課題につきコンセプトシートを確認・整理。課題となっている若い女性(10代から第一子出産期）を含め、「牛乳乳製品を取り入れたライフステージ別食生活モデル(仮称)」を作成する方向で外部パートナーの選定を含め準備に入る。(16ページ参照)
＜主な推進業務＞
○減塩運動支援プロジェクト
東北(秋田、宮城）での栄養士研修会で使用するテキスト、及び書籍として出版するレシピ集の編集会議を1月25日実施した。日本型料理への牛乳利用の視点で小山先生開発のレシピを掲載する(書籍は社会保険出版社刊、主婦の友社販売)。日本高血圧協会に働きかけ当プロジェクトに協力いただけることとなった。
3月5日メディアミルクセミナーで情報発信。(15ページ参照)
牛乳の血圧降下作用のアピール戦略立案のため、インターネットによる生活者調査を設計。(3月中に調査)
○専門雑誌への記事掲載
医師向け「メディカル朝日」別冊に「小児の食物アレルギーへの正しい対応」を準備。1月17日に実施の海老澤医師、今井医師、全学栄の長島先生、高見理事による座談会の内容を記事化する。海老澤、今井両先生開発の食物アレルギー対応シートが学校現場で十分で活用できていない実態が垣間見えた。
この内容を栄養士、栄養教諭、乳業メーカー相談員向けにリライトした別版を用意し、パンフレットや当協会ホームページに掲載するなど活用できるよう編集作業を進める。
○栄養士(学校栄養士含む)向け冊子「牛乳･乳製品の知識」増刷
昨年10月31日発刊の標題冊子の業界団体、乳業者からの要望が相次いだことから、従業員教育、また団体等を通じてインフルエンサーに配布することを目的に冊子を増刷。各事業所の要望数を確認の上で増刷数を決定する。要望8,800部、Ｊミルク内9,000部使用見込であることから20,000部増刷する。

■業界向け情報発信事業関連
＜セミナー等＞
○業界向けセミナー
①札幌会場(2月8日) ②名古屋会場(2月25日)
演題：「牛乳乳製品摂取はメタボリックシンドロームを救えるか」
講師：国立長寿医療研究センター臨床研究推進部長
細井 孝之 先生(15ページ参照)
＜主な推進業務＞
○業界向け情報提供リーフレット
第6弾：「牛乳で食事のGI値を下げよう」をホームページにアップ(2月19日)
第7弾：「がっこうきゅうしょくに、まいにちぎゅうにゅうがでるのはナゼかな？」「好き嫌いをなくして何でも美味しく食べられる子どもに！」「朝、ちゃんと食べてますか？新生活に牛乳をプラスしよう」（3月19日）

■学校給食用牛乳飲用定着事業関連
○HACCPに準じる衛生助言、費用補助事業は平成24年度終了の予定であったが、第5回理事会で乳業連合、農乳協より継続要請があり、関係団体の実務者打合せ(2月1日、2月6日)にて、総合衛生管理製造過程(マル総)取得促進を支援する事業に衣替えし、助成に当たり申請時に取得計画の提出･審査を盛り込む案を作成した。(第6回理事会で承認され、3月6日開催の臨時総会に提案)

■活動運営管理事業関連
＜専門部会、委員会の開催＞
○第5回マーケティング委員会（1月29日）
内容：①前回以降の事業報告及び今後の予定
1.牛乳乳製品に関する食生活動向調査の公表、2.牛乳飲用コウホート分析の報告、3.12/25乳の学術連合第一回運営委員会報告

②平成25年度普及関連、広報関連事業計画について
1. Ｊミルク全体の基本的な考え方、2. 生乳需要基盤強化対策事業について、3. 平成25年度普及関連、広報関連事業の具体的内容、4. 牛乳の日、牛乳月間の取組

○第2回普及専門部会（2月1日）
内容：1月29日のマーケティング委員会での確認事項の審議

＜主な推進業務＞
○インフルエンサーモニターの具体的な仕組み構築について検討を開始
○幼稚園、保育園における食育課題調査を準備中。
○信州大学インターバル速歩プログラムの実践
内容：24年9月から5か月間、協会職員で取り組んだ効果を検証するため血液検査、体力測定を2月に実施。詳細データは信州大学にて分析する。(4月内公表を目処に外部に報告できる内容に取りまとめる予定)
○木更津市 高橋てる子市議会議員主催講演会「牛乳はモー毒」(3月24日開催予定)への対応
内容：関東生乳販連と協議(2月25日)。地元関係者から議員にアプローチする方向で対応するのが望ましく、現地で協議いただくこととなった。Jミルクは当該ネガティブ情報に対する科学的見解を用意し支援する。

総務広報グループ関連

■広報関連事業
＜主な広報活動等＞
○メディアへのリリース、広報対策
①平成25年度通期の生乳及び牛乳乳製品需給見通しと今後の課題について（1月23日）、記者レク（1月28日）
②「牛乳乳製品に関する食生活動向調査2012」調査結果について(2月6日)
③研究レポート「飲用牛乳消費動向－少子・高齢化の進展のなかで」に示された牛乳消費構造に関する革新的知見について（2月6日）。取材対応（メディア3社、2月15日）
④「平成24年度Ｊミルクブロック会議」の開催について(2月14日)
⑤臨時総会の記者会見等について（2月19日）
⑥「血糖値コントロールで糖尿病＆肥満の予防・改善を」リーフレット制作について（2月19日）
⑦平成25年「牛乳の日・牛乳月間」に向けた取り組みの推進について(2月20日)

＜主な推進業務＞
○WEBサイトリニューアルに伴う移行補修作業
○平成24年度Ｊミルク「ブロック会議」開催に向けた確認・準備作業
○第31回メディアミルクセミナー開催準備（3月5日）
○WEBサイト（HP）への主な掲載情報
①平成25年度の生乳及び牛乳乳製品の需給見通しと今後の課題について（1月28日）
②ポジティブリスト制度に対応した「酪農乳業の一体的な取り組み」推進のための普及パンフレット（1月31日）
③インフルエンサー向けコンテンツ「牛乳とメタボ対策のいい関係」（2月1日）
④「牛乳乳製品に関する食生活動向調査2012」調査結果(2月6日)
⑤研究レポート「飲用牛乳消費動向－少子・高齢化の進展のなかで」に示された牛乳消費構造に関する革新的知見(2月6日)
⑥生乳検査精度管理認証制度に関する情報（2月8日）
⑦「平成24年度Ｊミルクブロック会議」の開催案内(2月14日)
⑧「血糖値コントロールで糖尿病＆肥満の予防・改善を」リーフレット(2月19日)
⑨「牛乳の日・牛乳月間」の案内(2月20日)
⑩「j-milkレポートvol-7」(2月21日)

■総務関連事業
＜会議の開催等＞
○第5回理事会（1月23日，平成24年度下期事業の推進状況、平成25年度事業計画の基本的考え方、平成25年度需給見通し）
○第6回理事会（2月20日，平成24年度第3回臨時総会の招集について［平成25年度会費及び拠出金］［平成25年度事業計画及び収支予算書］他）

■一般社団法人移行申請関係
○内閣府公益認定委員会より移行認可の答申（2月1日）
○許可書の交付（3月19日）

■その他の主な業務
○書式等改正　新法人移行：20年基準適用に向けた勘定科目選定の検討

平成25年
「牛乳の日・牛乳月間」に向けた取り組み

「牛乳の日・牛乳月間」の取り組みに当たっては、酪農乳業が推進する生活者とのコミュニケーション活動の起点となるように、業界全体で取り組みましょう。

6月1日は 牛乳の日 WORLD MILK DAY
6月は牛乳月間

業界全体の活動強化に向けた取り組み
①「6月1日 牛乳の日」の登録（記念日協会）
②「牛乳の日・牛乳月間」用統一ポスター（認知拡大）及び統一リーフレット、ロゴマークのデータ提供
③子どもターゲットに対するマス媒体（子ども新聞等）を活用した小学校等への配布及び告知
④メディアで記事化されるための話題作り
（H26年度以降の「6月1日牛乳の日」の啓発用ロゴ及びポスターなどの学校への公募、話題作りのための価値情報の作りこみ等 ）
⑤関連団体のイベント等の実施内容の情報収集及び統一的メディア広報等

Jミルク独自の取り組み
①「乳の学術連合」フォーラム（6月1日）
②老年医学会ランチョンセミナー（6月6日）
③栄養士セミナー（6月中）
④メディアミルクセミナー（6月中）
⑤食育全国推進大会（6月22～23日）での講演（上西先生、小山先生）
⑥牛乳の日・牛乳月間ホームページ開設（2月）（http://j-milk.jp/milkday）等

Report

コウホート分析調査より

牛乳消費構造に関する革新的知見を公表

「飲用牛乳消費動向－少子・高齢化の進展のなかで」から

森宏先生（専修大学名誉教授）及び三枝義清先生（元東京都立大学統計学教授）による共同研究の中間報告として、「飲用牛乳消費動向―少子・高齢化の進展のなかで」が発表された。本研究の主題は、わが国における牛乳消費の構造的な特徴と変化を、コウホート分析（＊1）の手法で精緻に解明することにあるが、同様の研究は、知り得るところでは、日本では初めてである。また、世界でも米国と北欧において、牛乳消費に関するコウホート研究が行われているが、利用されている基礎的データは世帯主データの単純平均値、あるいは散発に1 日だけの摂取量で、得られる結果は極めて限定的である。その意味合いからも本研究は世界的にみても極めて貴重な研究といえる。

牛乳消費に係る３つの研究成果

1 年齢別牛乳消費量とその経年変化

1980年代に若年齢層と高年齢層の牛乳消費量が逆転し最近ではその傾向がさらに強まっている。また、加齢による牛乳消費量の変化が戦前・戦中生まれと戦後生まれでは全く異なっていることが明らかとなった。

2 コウホート分析による牛乳消費規定要因の計量化

牛乳の消費行動に影響を与える3つの社会的効果（年齢効果、時代効果、世代効果）が定量的に推計され、その中で、2003～07年の間の牛乳消費量の変化に、年齢効果、世代効果、さらには経済的要因では説明できない何等かの重要な環境変化があったことが明らかとなった。

3 コウホート分析結果を活用した今後の牛乳消費量の予測

「年齢効果」は今後も同様の効果が続くものとし、「世代効果」は、今後出生してくる世代については、現状で推定できている最も若い世代の数値を当て、「時代効果」は2010年の数値を不変と想定して、予測が試みられている。因みに、2010年から2020年までの10年間で、一人当たりの家庭内牛乳消費量は人口比率で加重して約9%減少するという予測になっている。なお同じ手法で推定された2010年の「理論値」は、1人当たり26.90リッターで実際の消費量27.08リッターとほとんど変わらない。これらの予測については、今後、慎重な検討が望まれるが、予測の前提条件の検討が不十分であることを差し引いても、酪農乳業界にとっては十分に革新的な知見である。

年齢別牛乳家計消費予測、2015,2020,2025 年

（リットル / 年・１人当たり・構成比）

	2010（予測値）		2015		2020		2025	
年齢（歳）	消費量	人口%	消費量	人口%	消費量	人口%	消費量	人口%
12	20.36	5.76	20.36	5.58	20.36	5.46	20.36	5.45
17	19.09	5.92	18.01	5.94	18.01	5.81	18.01	5.80
22	18.00	6.34	16.24	6.13	15.16	6.27	15.16	6.25
27	17.86	7.18	16.40	6.54	14.64	6.46	13.56	6.73
32	20.21	8.18	19.01	7.37	17.55	6.82	15.79	6.86
37	21.86	9.58	20.22	8.37	19.02	7.63	17.56	7.19
42	25.20	8.56	22.78	9.79	21.14	8.65	19.94	8.03
47	28.29	7.86	25.24	8.73	22.82	10.10	21.18	9.08
52	30.72	7.48	28.20	7.99	25.15	8.96	22.73	10.56
57	33.23	8.48	32.62	7.55	30.10	8.15	27.05	9.32
62	34.87	9.82	36.39	8.49	35.78	7.64	33.26	8.41
67	36.25	8.03	38.09	9.73	39.61	8.50	39.00	7.81
72	38.05	6.82	38.74	7.79	40.58	9.56	42.10	8.52
加重平均	26.90	100.0	25.48	100.0	24.79	100.0	23.52	100.0

＊1 コウホート分析とは
時系列の様々なデータから、その変化の要因を世代効果、年齢効果、時代効果という3つの要因に分離して、その違いを読み解く手法。特定の世代に愛好されるものが加齢とともにどのように市場に影響を与えるのか、社会の変化が市場にどう影響するのか等を探ることができ、将来予測も可能となる。なお、コウホート（Cohort）の起源は古代ローマ軍団の単位を表す言葉で、人口統計学では「出生をほぼ同時期にする人口集団」と定義されている。

Topics

乳の学術連合公募の結果

平成25年度学術研究課題及び研究者が決定

大学、研究機関等に広く公募を行っていた学術研究の内容と研究者を選考

「牛乳乳製品健康科学会議」、「乳の社会文化ネットワーク」、「牛乳食育研究会」が、組織横断的な共同活動を行う連合体として平成24年度設立された「乳の学術連合」。昨年末より公募を行っていた平成25年度の学術研究内容及び研究者の選考が行われ、以下のように決定した。

分野	No	氏 名	研 究 機 関 名	役 職	研 究 課 題 名
牛乳乳製品健康科学	1	鈴木 良雄	順天堂大学大学院	准教授	ビタミンD強化牛乳がVD栄養状態に与える効果の検討
	2	亀井 康富	京都府立大学生命環境科学研究科 分子栄養学研究室	教 授	核内受容体を介したビタミンDによる脂質代謝遺伝子発現調節機構の解明
	3	酒井 一樹	尚絅大学生活科学部栄養科学科	助 手	ビタミンD強化牛乳が思春期女児の骨密度増加に与える影響の検討
	4	小川 栄伸	帝京大学医学部小児科	准教授	授乳婦におけるビタミンD強化牛乳による母乳中カルシウム・ビタミンD 含有量への効果
	5	徳原 大介	大阪市立大学大学院医学研究科 発達小児医学	講 師	粘膜免疫学を基盤とした、炎症性腸疾患に対するビタミンDの制御機構の解明
	6	長尾 慶和	宇都宮大学農学部（附属農場）	教 授	放牧の多面的効果を活かしたビタミンD強化牛乳の生産
	7	大久保 礼由	弘前大学大学院医学研究科社会医学講座	助 手	牛乳摂取が生活習慣病に及ぼす影響についての包括的大規模疫学的研究
	8	川上 浩	共立大学大学院	教 授	牛乳・乳製品摂取による高齢者のロコモティブシンドローム予防に関する研究
	9	水野 眞佐雄	北海道大学大学院教育学研究院	教 授	高齢者の生涯スポーツ実践における身体運動と組み合わせる牛乳乳製品 飲用習慣の形成が免疫応答と認知機能へ及ぼす効果
	10	成田 美紀	東京都健康長寿医療センター研究所	研究員	高齢者の牛乳飲用が栄養状態および認知機能低下に及ぼす影響
	11	佐藤 眞一	千葉県衛生研究所	技 監	安房地域における生活習慣病に関する疫学調査（おたっしゃ調査）を用いた中高齢者の食生活と生活習慣病発症・骨折発症・健康余命・自立期間に関する10年間のコホート研究
	12	湯川 晴美	國學院大学栃木短期大學	教 授	在宅高齢者における乳・乳製品摂取状況に関する長期縦断研究 −元気で長生きするための食生活のすすめ−
	13	小久保 喜弘	国立循環器病研究センター	医 長	都市部地域高齢者の乳製品摂取と脛動脈硬化進展とに関する研究
	14	田中 景子	福岡大学医学部衛生・公衆衛生学	講 師	幼児に於ける牛乳摂取のタイミングと睡眠及び精神発達との関連：九州・沖縄母子保健研究
	15	高岡 素子	神戸女学院大学	教 授	牛乳摂取タイミングの自律神経活動とストレス軽減に対する影響
	16	原田 哲夫	高知大学教育研究部人文社会科学系 教育学部問	教 授	朝食時及び夕食時（就床時）の牛乳摂取は子どもの精神衛生と睡眠健康を増進させるか
	17	田中 喜代次	筑波大学体育系大学院人間総合科学 研究科スポーツ医学専攻	教 授	牛乳・乳製品摂取および運動実践が睡眠にもたらす影響に関する研究
	18	金子 健彦	和洋女子大学家政学群生活科学科 人間栄養学研究室	教 授	乳製品摂取が皮膚構造に与える影響について −自立高齢者および若年者を対象とした栄養アセスメントを加えて−

分野	No	氏 名	研 究 機 関 名	役 職	研 究 課 題 名
乳の社会文化	1	日暮 晃一	NPO法人エコロジー・アーキスケープ	理 事	「日本酪農の発祥の地」における製乳事業創業期の酪農・製乳実態に関するフードシステム考古学的アプローチ
	2	平田 昌弘	帯広畜産大学　畜産科学科	准教授	世界の乳文化の多様性と日本での展開可能性に関する研究
	3	矢澤 好幸	日本酪農乳業史研究会	常務理事 事務局長	明治期の東京における牛乳事業の発展と経過の考察
	4	佐藤 奨平	財団法人農政調査委員会	研究員	日本練乳製造業の経営史的研究 −安房地域を中心として−
	5	小林 国之	北海道大学大学院農学研究院	助 教	放牧酪農における新規参入者支援における自主的グループの意義
	6	里村 睦弓	九州大学大学院生物資源環境科科学府	博士課程	6次産業化における酪農教育ファームの経営分析
	7	竹下 広宣	日本大学生物資源科学部	専任講師	被災地産乳の需要回復につながるリスクマネジメントの解明

分野	No	氏 名	研 究 機 関 名	役 職	研 究 課 題 名
食と教育	1	酒井 治子	東京家政学院大学現代生活学部	准教授	生命尊重概念の萌芽をめざす「乳」を活用した食に関する教育活動の意義と可能性 −幼児・学童期をつなぐアプローチ・スタートカリキュラムに着目して−
	2	原田 哲夫	高知大学教育研究部人文科学系教育学部門	教 授	リーフレット「朝牛乳で実現しよう！早寝、早起き、朝ごはんで3つのお得！」の教育的効果の検証
	3	柴 英里	高知大学教育研究部人文科学系教育学部門	講 師	アメリカにおける乳・乳製品摂取を促進する食育プログラムの理論と方法および使用教材の研究
	4	月野木 ルミ	大阪医科大学看護学部公衆衛生看護学領域	講 師	壮年期における、多機能携帯端末を用いた適切な乳製品飲料摂取方法に着目した原料プログラムの開発
	5	木村 純子	法政大学経営学部	教 授	乳を取り込んだ食に関わる教育活動の実態と効果：イタリアの事例
	6	湯地 敏史	宮崎大学　教育文化学部	准教授	タイ王国における義務教育の子どもたちの乳製品摂取量調査に関する研究
	7	永松 美希	日本獣医生命科学大学	教 授	酪農教育ファームにおける食育の展開と今後の課題 −フランスと日本の比較−
	8	松山 由美子	四天王寺大学短期大学保育科	准教授	幼稚園における牧場体験を取り入れた食育プログラムの開発と評価
	9	朝倉 比都美	帝京大学医学部付属病院栄養部	課 長	幼稚園・保育園での牛乳を活用した食育教材の作成

今後のスケジュール

平成25年4月1日～平成25年6月30日までの会議・行事の開催予定を掲載致します。

	開催日	場 所	内 容	講 師（敬称略）
乳の学術連合運営委員会	4月3日	Jミルク	平成25年度活動計画詳細の協議	
「乳の社会文化NT」総会	4月4日	KKRホテル東京	平成24年度活動報告、平成25年度活動計画等	
第１回ポジティブリスト委員会	4月未定	Jミルク会議室	定期的検査の実施内容について 他	
第１回課題検討委員会	5月24日	Jミルク会議室	酪農乳業共通課題の検討	
第１回理事会	5月29日	Jミルク会議室	平成25年度通常総会の招集 平成24年度事業報告及び決算 代表理事、役付理事の選任	
第１回需給委員会	5月未定	Jミルク会議室	需給見通し（25年度上期まで）の検討	
学術連合フォーラム	6月1日	時事通信ホール	牛乳の日シンポジウム（基調講演、パネルディスカッション）	未定
通常総会・理事会	6月18日	KKRホテル東京	平成25年度事業計画及び予算　役員の選任	

※上記は予定であり，日時・場所・講師等変更する場合があります。

編集後記

■今回の「乳の学術連合の窓」は、Ｊミルクの外部連携組織である「牛乳乳製品健康科学会議」代表幹事の折茂先生にご登場いただきました。今、生活者にとっての重要な課題である「メタボリックシンドローム」と「牛乳乳製品摂取」のおいしい関係（？）など、エビデンスの追求に、目が離せません！
■いよいよ2013.4.1より社団法人日本酪農乳業協会が一般社団法人Ｊミルクに衣替えです。皆様に親しまれますよう役職員一同頑張ってゆきますので、今後とも、篤いご支援、ご鞭撻、よろしくお願いします。（Ｔ．Ｉ）

お知らせ

生乳検査精度管理認証取得促進支援事業の実施について

平成25年度より、生乳検査精度管理制度における認証取得施設の促進、及び認証取得施設の認証の維持を図る観点から、公益財団法人日本乳業技術協会が実施する生乳検査外部精度管理調査の参加費用に対して、一定の助成する事といたしました。詳細はJミルクのHPをご覧ください。